

(トップページ:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/>)

(カタル:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/Qatar.html>)

マイライブラリー:0272

(注)本稿は2013年7月17日から30日まで4回にわたりブログ「アラビア半島定点観測」に連載した記事をまとめたものです。

(ニュース解説)カタル首長禅譲の謎に迫る

掲載日:2013.7.30

前田 高行

目次	頁
1. ハマド、息子に首長を譲る	1
2. カタル中興の祖、第八代ハマド首長	2
3. なぜ今、禅譲なのか？	3
4. 両親による院政？	5

1. ハマド、息子に首長を譲る



6月24日、カタルのハマド首長は息子のタミーム皇太子を新たな首長とする声明を発表した¹。1995年、宮廷クーデタにより父親のハリーフアを追放して首長に即位したハマドは1952年生まれの61歳。新首長のタミーム皇太子は1980年生まれでまだ33歳の若さである。

GCC各国の君主を見渡すとサウジアラビアのアブダラー国王の90歳を筆頭にサバーハ・クウェイト首長84歳、カブース・オマーン国王73歳、カーイファ・アブダビ首長(UAE大統領)65歳、ムハンマド・ドバイ首長(UAE副大統領)65歳、ハマド・バハレーン国王63歳などいずれもハマドより年長である。このような中で33歳のタミーム新首長は際立って若い。アブダラー・サウジアラビア国王とは祖父と孫ほどの年の開きがある。ハマドが首長を退くには若すぎ、まして報道される限りでは彼の健康に問題はなく、絶対的な権限を持つ彼の地位を脅かす王族も誰一人いない。そのような中でハマドがタミームに首長を禅譲したことに世界はアツと驚いたのである。

そもそもGCCで今回のように君主が自らの意思により生前退位した例は未だかつてない。冒頭に述べたようにハマド自身、クーデタで父親ハリーフアを追放したのであるが、そのハリーフアもやはりクーデタで従兄弟から首長の座を奪っている。他国の例ではオマーンのカブース現国王もクーデタで父親から王位を奪い取っている。最近ではさすがにそのような手荒な政権交代は影を潜め、いずれの国も君主の死亡により皇太子が即位する平穏な政権交代が普通である(但しクウェイトのように首長の死後、後継者を巡って王

族が対立、皇太子を廃して No.3 の首相を新首長とした例もある)。今回のように首長が皇太子に生前譲位するのは初めてである。

譲位発表の二日後、タミーム新首長は即位演説で父親の路線を踏襲すると語った。若い新首長に合わせて首相が交代し、退位したハマドには「国父 (HH the Father Emir)」の称号が与えられた²。

壮年のハマドが何故若い息子に禅譲したのか。絶対的な権限を持つ彼に意見のできる王族や側近は誰一人おらず今回の決断を彼一人で決めたことは間違いないであろう。禅譲の真意は謎であるが、本稿ではハマドの足跡を追い、また最近のカタール関連の報道を検証することにより、その謎を解き明かそうとするものである。

2. カタール中興の祖、第八代ハマド首長

ハマド前首長はカタールを統治するアル・サーニー家³の第八代首長である。1952年に第七代首長ハリーフアの長男として生まれたハマドは1977年に皇太子に即位、90年代初めには国防を含め国事全般を任されるようになっていた。しかし父がサウジアラビア、バハレーンなど近隣諸国との友好を重視したのに対し、皇太子のハマドはイラン、イラク及びイスラエルとの関係強化と言う独自の外交路線を取ろうとしたため両者は次第に対立するようになった。1995年、ハマドは父が外遊中にクーデタを敢行、第八代首長の座についた。この時、父のハリーフアは隣国バハレーンに庇護を求め、サウジアラビアのバックアップを得て反クーデタを企てた。結局ハマドは反クーデタの動きを封じて権力を確立したが、父子の反目は長く続き両者が和解したのは10年後の2004年のことであった。

実はハリーフアもクーデタで首長になっている。彼の場合は父親の第四代ハマド首長(即ち第八代ハマドの祖父)が亡くなり叔父のアリーが第五代首長に即位する時、長老の調停により第六代はハリーフアと決められていた。しかしアリーはその約束に背き自分の息子に第6代を譲ったため、ハリーフアは7年後にクーデタで従兄弟の第6代を廃位して第7代首長となったのである。⁴当時20歳であったハマド前首長はその一部始終を見ていたことになる。

ハマドは実権掌握後も内政面では国防相のポストを離さず反政府の動きを厳しく監視し、それと同時に外交面ではしばしばサウジアラビアと微妙に対立している。これは二つのクーデタ事件がハマドの内面に深く影を落としているためと考えられる。

それはともかくハマドは1995年に首長に即位するや直ちに経済・文化・外交等多方面にわたる国威発揚に取り組んだ。経済面では皇太子時代に着手した沖合天然ガス田の開発と LNG 輸出政策を推進、1997年の日本向け輸出を皮切りにまたたく間に世界一の LNG 輸出国となった。BP の統計によればカタールの天然ガスの埋蔵量は世界3位であり、また去年の生産量は米国、ロシア、イランに次いで世界4位である⁵。

豊富な天然ガスによりカタールの GDP は飛躍的に増加、一人当たり GDP は99,731ドルに達している。

これは日本(46, 736ドル)の2倍以上、ルクセンブルグに次いで世界で2番目に高い(IMF2013年4月統計)。一人当たりGDPはGDP総額をその国の人口で割った数値であるが、カタールの場合人口の8割以上は外国人である。従って本来のカタール国民の一人当たりGDPは実質的に世界一であると言える。ハマドは有り余る富をインフラや住宅・病院・大学の建設等に惜しみなくつぎ込んできた。それは一般国民に対して世界最高水準の生活・教育・医療を与えることであったが、彼のもう一つの目論見は国際社会におけるカタールの知名度を上げることであった⁶。

その最大の成果こそアル・ジャジーラ・テレビと言ってよいであろう。1996年英国BBCのサウジアラビア王室報道が英国とサウジアラビアの外交問題に発展、このためBBCはアラビア語放送局を閉鎖した。この時カタールはスタッフと機材を丸ごと買い取りアル・ジャジーラを開局したのである。アル・ジャジーラは既成の国営メディアに飽き足らなかったアラブの視聴者から熱狂的な支持を受け、またたくまにアラブ圏を代表するメディアに成長したのである。アル・ジャジーラは中東のあらゆる紛争地に入り込み欧米メディアを寄せ付けない強味を発揮した。最大のヒットは2003年のイラク戦争であろう。CNNなど欧米のメディアが前線取材に終始したのに対して、アル・ジャジーラはバグダッドから多国籍軍のミサイル攻撃の映像を送り届けたのである。そして2011年の「アラブの春」でも騒乱当事国に張り巡らせたネットワークによりリビアにおけるカダフィ殺害の現場報道など他の追随を許さない。

ハマドはスポーツの面でも次々と国威発揚のイベントを打ち上げ、2006年にはアジア競技大会の開催にこぎつけた。これをてこに2016年と2020年のオリンピック開催に名乗りを上げたのであるが、これについては2回とも落選している。しかしカタールは2022年のサッカー・ワールドカップの誘致に成功、現在巨大なサッカー場、豪華ホテル、新国際空港、メトロ鉄道網などの建設工事に取り組んでいる。

さらに外交面においてもカタールの露出度アップに余念がない。2001年にWTO閣僚会合を首都ドーハに誘致、これは後に「ドーハ・ラウンド」と呼ばれこれを機にカタールとドーハの名が一躍世界に知られるきっかけになったのである。また地域の紛争調停にも積極的に乗り出し、他国が躊躇するような微妙な外交問題にも積極的に取り組んできた。カタールはアラブ諸国の中で唯一イスラエルとの外交関係を維持しドーハにイスラエル事務所の開設を認めている。スーダンやイエメン内戦でも調停に乗り出し、リビア紛争ではNATO軍に参加してカダフィ追い落としに協力している。またGCCの中でいち早くシリア反政府派を支援し、さらにアフガニスタン反政府派のタリバンにドーハ事務所開設を認め、カルザイ政権とタリバンの和平交渉を促している⁷。

ハマド首長の治世は豪華絢爛なショーを見せられているようであった。彼はまさに「カタール中興の祖」と呼ぶにふさわしく、輝ける「国父(HH the Father Emir)」なのである。そのような絶頂期のハマドが何故首長を退く決意をしたのであろうか？

3. なぜ今、禅譲なのか？

カタールの首長ポストにはアル・サーニー一族の当主と言う私的な顔とカタール国家の最高権力者と言う公的な顔の二つの側面がある。ハマドはそれぞれについて考え抜いた末に今回の結論を出したのである

う。



まずアル・サーニー家の当主として見ればハマドは自分の目の黒いうちにタミム皇太子を首長ポストにつけたかったと考えられる。ハマドには少なくとも10人の息子がおりタミムは4番目である。彼は同じアル・サーニー一族である第一王妃マリアムとの間に長男ミシャル、次男ファハドの二人をもうけ、その後結婚したミスナッド家出身の第二王妃モーザとの間に三男ジャーシム、四男タミム他3人の息子が生まれた。ハマド自身は先王ハリーフアの長男であり、数人の異母弟がいる。

ハマドはクーデタで首長に就いた時、一歳違いの異母弟アブダッラーを首相に任命し、翌年三男のジャーシムを皇太子に指名した。家柄と序列を重んじるアラブ部族社会の中でハマドが一族の娘との間にできた長男或いは次男を皇太子に指名しなかった理由は不明である。そして2003年、彼は皇太子を四男タミムに交代させた。ジャーシムは重い糖尿病のため将来の首長の重責を担えないと判断したようである。さらに2007年には首相を異母弟のアブダッラーから遠縁のハマド・ビン・ヒヤーシムにすげ替えた。

ハマドをめぐる人間関係は複雑であるが、問題を複雑にしているのはハマド自身とも言えそうだ。それは彼の性格によるものかもしれない。ハマドは父親が従兄弟(つまりハマドの大叔父)に対して行ったクーデタを目撃し、さらに自らもクーデタで父親を追放したタフな独裁者である。独裁者は例外なく老獪な政治家であり、猜疑心が強く名誉欲も強い。実は今回の禅譲をこのような視点で見ると極めて解りやすいのである。

ハマドは61歳であり健康にも問題無くまだ10年や20年は首長を続けることができる。しかし彼がいつまでも権力の座に執着した場合、いつか綻びが生まれ自らがクーデタで倒されるかもしれない。長期政権の末に息子のタミムに寝首を搔かれると言う可能性すらゼロとは言えない。ただタミムは写真(上記)を見てもわかるとおり育ちの良いお坊ちゃんタイプであり、言動も穏やかなので父親を裏切るとはまずないと思われる(逆説的に言えばだからこそハマドはタミムに譲る気になったとも言えそうだ)。むしろ問題はタミムが皇太子のままハマドが亡くなった時、タミムがすんなり首長ポストに就くことができるか否かの方がハマドにとって心配であろう。

今、首長ポストを禅譲すれば、事前に騒動の芽を摘むことができるうえ、他の GCC 諸国に例を見ない平和的なトップ交代として欧米諸国での自分の名声が高まる、とハマドは踏んでいるに違いない。彼が目指しているのは GCC 各国とは一味も二味も違うカタールである。そしてハマドは欧米の評価を非常に気にしている。つい最近オランダ、ベルギーなどで女王或いは国王の交代が続いた。彼はこれらヨーロッパ王室のひそみに倣い、自らが賢明な君主であることをアピールして世界の注目を集めたいのである。

以上は彼の禅譲を好意的に捉えた見方であるが、もう一つ別の見方―裏読み―もある。それは順風満帆であった対外政策で最近誤算が続いていることである。相次ぐカタール外交の蹉跎でハマドはやる気をなくしている。その原因はムスリム同胞団との近すぎる関係である。そのムスリム同胞団とカタールをつなぐ人物がカラダウィ師である。カラダウィはエジプトで生まれの著名なイスラム法学者であり、大学卒業後ムスリ

ム同胞団に参加し、何度か投獄された。1963年に追放されてカタールに渡り、アルジャジーラ放送の宗教番組でアラブ全域で評判があがった。

エジプトのムバラク政権が倒れムスリム同胞団が議会の過半数を制し、ムルシ大統領が誕生した結果、ハマド首長は他の湾岸諸国に先んじてエジプトと強い関係を築くことができた。欧米諸国はイスラム政党のムルシ政権に警戒心を抱いたものの、民主的な選挙で選ばれた政権を支持しない訳にはゆかない。カタールにとってはアラブの雄エジプトと欧米の橋渡し役を担う絶好のチャンスを掴んだかに見えた。

しかしムルシ政権は経済政策に失敗、財政は困窮し外貨が底をついた。このためカタールは2回にわたり総額80億ドルもの支援をおこなった⁸。この間、他の GCC 諸国は事態を静観している。しかしエジプトの民心は離反、ついに軍部が動き出してムルシを排除し暫定政権が樹立された。するとカタールに替わってサウジアラビア、UAE 及びクウェイトが合計120億ドルの支援に乗り出した。カタールの援助は「死に金」になったのである。裏目に出たのはエジプトだけではない。カタールは内戦状態に陥ったシリアで早くから反政府派に肩入れをした。欧米諸国もイランの影を背負ったアサド独裁政権に抵抗する反政府派を支援する姿勢を示している。しかし反政府派にイランのバックアップを受けたヒズボラが潜り込んでいるため欧米は軍事支援には及び腰である。その結果、シリア内戦は泥沼化し解決の様相が見えない。男気を見せようとしたハマドは出番を失ったのである。

ハマドとムスリム同胞団との腐れ縁はハマドの隠し兵器とも言われるアル・ジャジーラ TV にも暗い影を落としているようだ。最近のアル・ジャジーラはムスリム同胞団系に乗っ取られ、放送内容が片寄っていると言われ視聴者が鼻白んでいる。アル・ジャジーラのモットーは「The opinion and the counter opinion (一つの意見とその反対意見)」であり、どちらにもくみしないことである(それは裏返せば自己主張が無いということでもあるが)。最近の報道姿勢はモットーを逸脱しているのである。

最近のハマド外交は精彩を欠くどころか裏目の連続である。彼はやる気を失った。それが彼が息子に首長ポストを禅譲した理由の一つではなかろうか。ハマドも所詮人の子であり孤独な独裁者なのである。

4. 両親による院政？

33歳の若さでカタール首長に即位したタミーム。即位直後はお祝いに駆け付けた各国元首との接遇に追われ、また現在ではラマダンで王宮を訪れる市民からお祝いの言葉を受けるのに忙しい。彼が具体的な行動を起こすのはラマダンの休暇明けからであるが、外交、内政ともその手腕は未知数である。天然ガス輸出のおかげで経済は絶好調であり、国内では2022年のワールドカップ開催を目指して大型の公共工事が次々と着工されている。国内の治安は安定しており、外交にも今のところこれと言った問題は見当たらない。カタールはまさに順風満帆の上げ潮に乗っている。タミム新首長は実に恵まれた状況下でトップの座についた幸運児と言えよう。

しかし真価を問われるのはこれからである。国内に問題が無いだけに外交面の力量が問われる。外交デビューは年末に開催される GCC サミットであろう。90歳近いサウジアラビアのアブダッラー国王をはじめ他

の GCC5カ国の首脳とは父親或いは祖父ほどの歳の開きがある。カタールを除く各国首脳はファミリーの結束を誇っている。そのような中に飛び込んでタミームはカタールの国益を守ることができるのであろうか。

前首長のハマドはしばしば他の GCC 諸国の神経を逆なでするような言辞を弄し一匹狼の姿勢をとっていた。彼の場合は欧米民主主義国家が背後にいるという自信の裏付けがあったからである。米国にはウエイド空軍基地を貸し与え、またリビア内戦では NATO に協力して反リビア勢力を支援している。その他イエメン、スーダン、パレスチナなどカネを惜しみなくばらまいた国は数知れない。援助を求めてドーハ詣でをする貧しい国々に対しても大盤振る舞いを繰り広げている。カタールは頼りになる国である。但しお目当てはカネだけでありカタールそのものを頼りにしている訳ではない。カタール首長にとって都合がよいのは、そのようにいくら散財しても国内の批判が全くないことである。カタール国民は世界一の豊かさに酔いしれ政府批判など考えてもいない。為政者にとってこれほど楽なことはないであろう。

タミーム新首長の置かれた立場もその延長上にある。従って彼は内政外交を思うがままに操ることができるはずである。しかし彼は育ちが良く大人しい典型的な二代目であり、父親のような老獪で権力欲と名誉欲に凝り固まった独裁者にはなれそうもない。新首長は強いリーダーシップを発揮できない優柔不断な支配者になりそうだ。新首長は即位演説でこれまでの方針を継続すると明言し、父親のハマドに「HH the Father Emir (首長国の父、即ち国父)」の称号を与えた。ここに父子相克の萌芽が隠されていると見るのはあながち穿ちすぎではなかろう。

父子相克はおそらく外交方針をめぐる表面化すると思われる。新首長はサウジアラビアを中心に結束する GCC 首脳に籠絡される可能性が高い。また欧米諸国或いは貧しい開発途上国のカネの無心に対してもタミームの人の良さが存分に発揮されるであろう。これらのことは GCC が一枚岩であることを内外に示し、或いはカタールの国際貢献と言う面で同国の評価を高めることになる。しかし息子の手ぬるいやり方がカタールに世界の称賛を集めると言うハマドの目指す構図に結び付くかどうかは定かでない。いつの世にもカネをむしり取られるだけで国際的な地位が上がらない国家の例はある。独裁者ハマドにとってはカタールが単なる金づると軽んじられることは耐えられないであろう。

最初のうちこそ黙っていてもハマドは遅かれ早かれ息子の政治に口出しするに違いない。院政の始まりである。否、ハマドは既にその手を打っていると言えるかもしれない。それが新内閣の閣僚リストに現れている⁹。新内閣には「国防担当国務相」はいるが、「国防相」そのものがないことに注目すべきである。ハマドは1995年にクーデタで首長に就き、まず首相と国防相を兼務した。その後首相を義弟、さらに遠縁のハマド・ビン・ジャーシムに挿げ替えた後も国防相のポストは手離さなかった。彼にとって国軍こそ地位安泰の要なのである。今回、新首相兼内務相に治安の要である旧内閣の内務担当相の王族アブダッラーが昇格し、国防担当国務相にハマド・アルアッティヤ将軍が任命されている。両名はハマド前首長の子飼いの腹心と言ってよいであろう。ハマドは息子に禅譲したと言いながら実は息子に好き勝手にやらせないような体制を押しつけているのかもしれない。



ハマドの他にもう一人新首長の行動を束縛する人物がいる。タミームの母親モーザ前王妃である。アラブ・イスラム世界ではファースト・レディと言えども表舞台に出ることは稀であるが、モーザは夫ハマドの外国訪問に同行し華々しく活動した。時には単独で国際会議に出席し、国連事務総長と並んだ写真がメディアをにぎわせたりもした。サルコジ前仏大統領時代には仏高等芸術アカデミー会員に推された。しかしこの時「男装の麗人」姿の写真が報道され(左参照)、イスラム女性にあるまじきことと

国内外で輿論を買った¹⁰。この事件以来さすがに政治の場は控えているが相変わらず慈善事業や王室外交に精を出しており、オランダ国王即位式では日本の皇太子夫妻の隣に座るなどファースト・レディとして振舞っている。タミーム首長にはジャワヒールとアル・アヌードの二人の妃がおり¹¹、ジャワヒールはアル・サーニー一族の王女であるが二人とも表舞台に顔を出していない。モーザ妃がタミーム新首長の王妃にファースト・レディの座を譲る気配はなさそうだ。

「国父」の称号を得て国政の主導権を握り続けようと目論むハマド。そして「首長の生母」の称号を盾にファースト・レディの座を嫁に渡す気配のないモーザ。カタールでは新首長の両親による院政が敷かれようとしている。

(完)

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp

¹ Gulf Times on 2013/6/25, 'Sheikh Tamim to be Emir',
<http://www.gulf-times.com/qatar/178/details/357408/sheikh-tamim-to-be-emir>

² Gulf Times on 2013/6/27, 'Emir vows to follow his father's path',
<http://www.gulf-times.com/qatar/178/details/357595/emir-vows-to-follow-his-father%e2%80%99s-%e2%80%98path%e2%80%99>

³ GCC 諸国の王家・首長家第三回「カタール・アル・サーニー家」参照。
<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0119RulingHouseInGccQatar.pdf>

⁴ アル・サーニー家家系図 <http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-4QatarAlThani.pdf> 参照。

⁵ ブログ「内外の石油情報を読み解く」連載中の「BP エネルギーレポート 2013年版解説シリーズ」参照。http://blog.goo.ne.jp/maedatakayuki_1943

⁶ 拙稿「カタールとアル・サーニー家：金持ちだからできること、小国だからできないこと」参照。
<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/A02QatarAlThani.pdf>

⁷ Gulf Times on 2013/6/18, 'Taliban set to open office in Doha'
<http://www.gulf-times.com/qatar/178/details/356681/taliban-%e2%80%98set-to-open-office-in-doha%e2%80%99>

⁸ Gulf Times on 2013/4/11, 'Qatar in extra \$3bn aid offer to Egypt'

<http://www.gulf-times.com/qatar/178/details/348725/qatar-in-extra-%243bn-aid-offer-to-egypt>

⁹ カタール新内閣の閣僚リストは <http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/4-4QatarCabinet.pdf> 参照。

¹⁰ 拙稿「中東VIP劇場カタール篇：サルコジのカモにされたカタール首長夫妻」参照。

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0228VipTheatreQatarHamad.pdf>

¹¹ 家系図 <http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-4QatarAlThani.pdf> 参照。